

9753 アイエックス・ナレッジ

安藤 文男 (アンドウ フミオ)

アイエックス・ナレッジ株式会社社長

堅実かつ安定的な収益を確保できる経営体制を構築中

◆2013年3月期のトピックス

2012年4月に入社した新入社員は48名。

当社は社会貢献活動の一つとして小学生向けに「ロボット&プログラム体験教室」を提供しており、当期は通算で4回開催したが、子どもたちの理数離れが叫ばれているなか、今後も地道に活動を継続していきたい。

5月から8月にかけては、総額25百万円で自己株式15万株を取得。これは、経営環境の変化に対応した機動的な資本政策を実施するため、この時点で自己株式比率は10.44%となった。

6月にはソーシャルメディア検索エンジン「アルカナサーチ」のサービスを開始するとともに、「銀行システム部」を新設、銀行向けの受注体制を強化した。

また9月以降、水戸事業所の本社統合ほか、大幅な事業再編を実施した。

新しい期を迎えた2013年4月には、昨年と同じ48名の新入社員が入社。来る6月には経営のさらなるスピード化を図る主旨から代表取締役2名体制に移行する予定である。

◆決算の概要

当期(2013年3月期)の経済環境は、前半で東日本大震災復興需要から景気の回復基調がみえたものの、欧州金融不安による円高、新興国の経済成長鈍化など先行きの不透明感は拭えず、顧客のIT投資に対する慎重姿勢も残っていた。が、年末の政権交代を境に急激に変化してきている。

このようななかで当社グループは、コア事業を堅守しつつ、経営資源の「選択」と「集中」により事業環境の整備に腐心した。具体的には、昨年9月に水戸事業所を閉鎖、本社に統合した。そして期末にかけて、人材教育の子会社IKIアットラーニングの事業を当社に統合。また、マーケティング・リサーチ事業を(株)リサーチ・アンド・デベロップメント社に事業譲渡。さらに、連結子会社アイケーネットの全株式を合併相手の(株)アクロネットに譲渡した。これらは経営体質の改善、利益の向上のために実施したものである。

2013年3月期連結決算は、売上高155億25百万円(前期比1.3%増)、営業利益1億91百万円(同38.6%増)、経常利益2億20百万円(同10.9%増)、当期純利益1億53百万円(前年度は当期順損失84百万円)と増収・増益となった。

売上高は、大手ベンダーの主要案件が終息したものの、証券などの取引所関連案件やメガバンク次期案件等の寄与により、前期比小幅な伸びとなった。

一方営業利益は、前期比53百万円の増加(伸び率では38.6%増)となった。これは売上高の増加1億96百万円に伴って、売上原価が1億71百万円増加したが、業務の効率化や人件費削減努力が実り、販売管理費が28百万円減少したためである。

売上高を業種別にみると、主力の「情報・通信」で51億7百万円(前期59億22百万円)と減少したが、「金融・証券」では継続案件に次期システム開発案件などが加わり38億42百万円(前期32億67百万円)、「産業・サー

ビス」もストレージ(大容量記憶装置)向けの組込みソフト開発などが貢献し48億14百万円(前期46億57百万円)、また「社会・公共」では、通信キャリアで培った料金系の開発ノウハウを水平展開したガス事業者向けの案件が伸びて17億60百万円(同14億83百万円)、といずれも増加した。これら4分野のシェアはそれぞれ概ねで3:3:3:1の割合で推移してきたが、とくに社会・公共のシェア拡大を事業目標のひとつに掲げている。

なお、顧客別の売上構成では、上位20位で全体の80%を占めた。

キャッシュフローは、営業活動CFがプラス1億94百万円(主因は税金等調整前当期純利益等)、投資活動CFがマイナス2億円(主因は銀行優先株買入れ等)、財務活動CFがプラス2億98百万円(主因は長期借入金増)となり、キャッシュ残高は期初に比べて2億93百万円増加し、期末残高は35億12百万円となった。なかでも長期借入金の増加は財務基盤安定化を意図したものだ。

◆2014年3月期業績の見通し

取り巻く市場環境を見ると、いわゆる“アベノミクス”による経済効果への期待が大きく現れてきていると言える。当業界においては、従来の「受託開発型」から「サービス提供型」へ、顧客ニーズが大きく変化しつつある。また、クラウドやビッグデータ関連での市場の拡大が予想され、さらにシステムの信頼性に対する要求はますます高まってくるものと見ている。

当社はこうした市場や顧客のニーズを着実に捉え、しっかりとしたモノづくりと高品質のサービスで応えていくつもりだ。とくにクラウドの進展で需要が見込まれる組込み開発、システム基盤・制御系技術者の育成増員、第三者視点でシステムの品質を検証する「システム検証サービス」などに力を注ぎながら、収益向上のための人材ローテーションを推進していく。

なお当期4月に「経営のスピード化」を図るための経営体制を整えた。事業、営業、管理と大きく3つに分けた部門を、取締役三名がそれぞれ牽引することによって、経営方針をすばやく実践に移し、顧客の多様化するニーズに迅速に応えていくつもりだ。

2014年3月期業績予想(事業再編により、2014年3月期は当社単体での決算となる)は、売上高151億42百万円(前期比2.5%減)、営業利益3億8百万円(同61.3%増)、経常利益3億15百万円(同43.2%増)、当期純利益2億60百万円(同69.9%増)、と減収・増益の計画である。減収となるのは、前述したアイケーネット、水戸事業所、マーケティング・リサーチ事業などの事業再編による影響が主で、利益をしっかりと確保することを優先した予算だ。

中期財務目標(単体ベース)は、目標年度(2016年3月期)において、売上高160億円、営業利益5億50百万円、営業利益率3.4%とした。中長期的に、堅実かつ安定的な収益を確保できる経営体制を構築していくことに重きをおいた目標だ。配当については、現在の1株当たり5円配当を当面続けるが、目標年度には1株当たり10円に増配したい。また、財務体質を強化させるために、内部留保も重視し、純資産額を増やしていきたいとも考えている。

◆質 疑 応 答◆

前期で子会社を売却したり事業譲渡した分が、2014年3月期の減収要因ということだが、それらの利益的な寄与はどうだったのか。

アイケーネットにおいては、ほとんどプラスマイナスゼロ。本社に統合した水戸事業所、事業譲渡したマーケティング・リサーチ事業はともに厳しい収益状況だった。

2014年3月期の利益拡大のポイントを伺いたい。

核になるのはメガバンク統合関係。また、広告代理店、自動車部品関係の案件受注が寄与すると見ている。

前期に長期借入金が増加しているが、背景を伺いたい。

銀行コミットメントラインの解約があり、手元資金を厚くするために、安全を見て借入を増加したものである。

(平成25年5月21日・東京)

* 当日の説明会資料は以下のHPアドレスから見るができます。

<http://www.ikic.co.jp/ir/report/explanation.html>